

# 第13回

## 先にできていたメロディーに 詞をはめ込んだ『蒼い星くず』

ビートルズが来日した昭和41年6月、その影響でGSブームの萌芽を感じさせていた同年初、ベンチャーズ作曲のエレキサウンドに乗せて、舶来オリジナル歌謡曲『二人の銀座』（作詞・永六輔、歌・山内賢、和泉雅子）が大ヒットしました。

当初、ベンチャーズのオリジナル・インストナンバー『GINZA LIGHTS（ギンザライツ）』の歌謡曲化に対し、作詞を岩谷時子に依頼する、という話があったそうです。ご存じのように、越路吹雪のマネージャー役だった岩谷は、以前から越路のためのシャンソンの訳詞はもちろん、アダモやアメリカンポップスの訳詞に力を発揮していました。つまり、ザ・ピーナッツや園まりなどの歌謡作詞家としてだけでなく、メロディーが先にできている外国曲に歌詞をはめ込みつつ、見事なラブソングに仕立て上げる才能は、すでに認められていました。

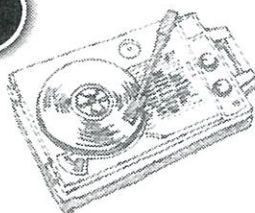
そして、作詞家として日本中に知れ渡ることになった加山雄三の『君

といつまでも』の大ヒットによって、続けとばかりに昭和41年4月、『スリー・ブルー・スターズ』と題され

名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵・松本浦



ていた加山のオリジナル曲に歌詞をはめ込んだ『蒼い星くず』を発表、加山人気が絶頂のときでもあり、これも大ヒットします。

加山がベンチャーズを意識して作曲したインストナンバーでしたが、当初は東芝ではなくコロムビアから発売されていて、まだデビュー前のランチャーズと一緒に演奏しています。もちろん、歌詞がついていないので演奏だけですが、憧れのベンチャーズをしのぐようなエレキサウンドになっていて、歌謡曲版『蒼い星くず』の印象とはかなり異なります。歌詞が付けられた『蒼い星くず』を加山の歌で聴いたとき、従来耳に

してきた歌謡曲のアクセントとはずいぶん違うような印象を抱いたものでした。それは、永六輔が歌詞をはめ込んだ『二人の銀座』を初めて耳にしたときと同じ違和感でした。アクセントが平坦な日本語を上下させるように歌う、その違和感こそエレキサウンドの斬新さでもあったのです。

大ヒットにつながったことで、おそらく東芝レコードのスタッフの頭の中に、ベンチャーズの『ギンザライツ』を歌謡曲化するための作詞家として、岩谷時子の名前が出てきたとしても不思議ではないでしょう。

加山がベンチャーズ・スタイルのインストナンバーとして作曲した『蒼い星くず』のメロディーラインには『二人の銀座』のメロディーラインと共通するものがあります。

発売順では、ベンチャーズの米国版に収録されていた『ギンザライツ』より『蒼い星くず』のほうが2か月ほど早いのですが、加山とベンチャーズが太平洋を挟んで心を寄り添わせてなされた2つの曲に近似性を感じられるとしたら、この名曲をさらに楽しむことができるのではないかな、と思うのですが……。